

光明寺だより

第68号

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

心に残る詩

私の落ち度

大久保さき

「あの人にこう言われた」

じゃなくて

「この人にこう言われた」

じゃなくて

あの人に

あんなことを

言わせてしまった

この人に

こんなこと

言わせてしまった

言わせてしまった

私の落ち度

産経新聞「朝の詩」より

新盆合同追悼法要

8月13日・14日

一両日とも一

第1回目 18時30分より

第2回目 20時00分より

★該当のお家には「ご案内」を同封しています



一口法話

あたり前を喜ぶ



筋ジストロフィーという難病にかかり、身体を全く動かすことの出来なくなつた井村利清さんという人の「あたりまえ」という詩をご紹介します。

こんなすばらしいことを
みんななぜ喜ばないのでしょう
あたりまえであるということをお父さんがいる お母さんがいる
手が二本あって 足が二本ある
行きたいところへ自分でいける
音が聞こえて 声が出る
こんな幸せあるでしょうか
しかし誰もこれを喜ばない
あたり前だと笑っている
ご飯が食べられる 夜になると眠れる
そして 朝が来る 空気が胸一杯吸える
笑える 泣ける 叫ぶことが出来る
走りまわれる
みんなあたりまえのこと

こんな素晴らしいことをみんなは喜ばない
そのありがたさを知っているのは
それをなくした人たちだけ
なぜでしょう あたりまえ……

以上のような詩であります。
まことにその通りです。

この詩にあるように、私たちは目が見える
ことや手足が動くことをあたり前だと思
っています。

なぜ喜ぼうとしないのでしょうか？

それは、目が見えることや手足が動くとい
ったことは、生きるに先立ってすでに備
わっているからだと思います。

例えてみれば、物の豊かな時代に生まれ
た子供が、物のありがたみを知らないのと
同じことです。

生まれた時にはすでに物が溢れています
から、物があるのがあたり前だと思うよう
なものです。

ところが、この詩にあるように、私たち
があたり前だと思っているものは、まこと
にかけがえのないものばかりです。それ
は、どれ一つ取り上げても人間が作り出す
ことは出来ません。すべて頂きものです。

しかも、その一つ一つに、私のいのちを
生かす「ハタラク」 というものが備わって
いるのです。

例えば、「息をする」ということを考え
てみましょう。

私たちは生まれて今日まで一度も休む
ことなく息をしています。もちろん、そ
んなことはあたり前だと思っています。

ところが、この「息をする」という行為
が、すでに自分の意思ではないのです。

自分の意思で息をするというのは、「今
から息を吸うぞ！次は吐くぞ！」とい
うようにすることを言うのです。

もしそんなことをしておったら、夜も
おちおち眠れません。私たちが毎日安心
して眠られるのは、自分の意志に関係な
く、息をさせる「ハタラク」というものが
備わっているからです。もちろん、この
息をする「ハタラク」は人間が作ったも
のではありません。

元京都大学の総長で脳生理学の世界的
権威者であられた平沢興先生は、「私は、
朝、目が覚めるということが不思議でな
らない」といつもおっしゃっていたそう
です。

「一体どこからそんなハタラクがやって
きて、私の目を覚ますのか。

私はこの方面の研究を四十
年間やってきたが、私を含
め世界中の科学者でこのこ
とを完全に説明できる者はおりません」



とおっしゃっています。

このように、息をすることも、朝、目が覚めることも、私たちはあたり前のことだと思っ

ある、そのあたり前と想っているあらゆるものの中に、我がいのちを生かし続ける大いなる「ハタラキ」、すなわち「仏」を見出されたのです。

さらに、道元禪師は「尽十方界真実人体」ともおっしゃっています。

つまり、この宇宙全部が自分の体であるというのです。



その「ハタラキ」は人間の思いを超えたものです。しかも、あらゆるものを生かそうとするハタラキを持っています。この「ハタラキ」こそ「仏」と呼ばれるもののなのです。

それは、この宇宙に存在するもののどれ一つ欠けても、私のいのちは成り立たないということでもあります。

曹洞宗の開祖・道元禪師は五年間の中国での修行を終え、日本に帰られた時、「眼横鼻直なることを認得して・・・空手にして郷に帰る」とおっしゃいました。

まさに私たちは、おかげさまのど真ん中に身を置いていたのです。

意識すれば「仏法の奥義を窮めようと意気込んで中国に修行に出たが、学んだことといえば、目が横について、鼻がまっすぐに縦についてついているという事、ただそれだけだ」ということです。

しかし、その事実には中々気づくうとしません。そこに人間の愚かさ、思ひ上がりがあるのです。

眼は横に鼻は縦についている・・・これほどあたり前といえどあたり前のことではありませんが、そのあたり前の事実の中に、道元禪師は我がいのちを生かし続ける「仏」というものを見出されたのだと思います。

そんな愚かな私たちに向かって、「あなたのいのちは生かされて生きているいのちですよ。そのことに目覚めて下さいね」と呼び続けている声が南無阿弥陀仏なのです。

あたり前であることの素晴らしさに気づいてほしいという井村利清さんの切実な願いは、この阿弥陀さまの願い（大悲心）に相通じるものがあります。

深い目で見れば、ありとしあらゆるものが不思議であり、この世そのままが浄土であらう。

★今回の一口法話は、テレフォン法話第三集に掲載したものです。

それは、眼や鼻だけではありません。空気があり水があり太陽があり大地が

あたりに深く喜びと感動を覚える時、私たちは間違いなく、み仏の大悲の中に包まれて

あることを確信することが出来るのです。最後に、平沢興先生の言葉を紹介します。

：今朝も無事に目がさめた。手も動く足も動く。目も見える。耳も聞こえる。ああ今朝も生きている。いや生かされているのである。60兆個の全身細胞はそれぞれ分を持って完全な分業作業を行いながら、一つの大調和に統合されて、今朝のこの命を保っているのである。この奇跡の前には全く言うべき言葉もない。

しかしこの奇跡はただ私だけの奇跡ではなく、今朝健やかに目を覚ましたすべての者の奇跡である。いや、実はただそれだけではなく、草にも木にも路傍の一つの石にも、皆それぞれの奇跡があり調和があるのである。

深い目で見れば、ありとしあらゆるものが不思議であり、この世そのままが浄土であらう。

山川草木悉皆成仏―この世界にあるすべてのものは皆仏様である……

★今回の一口法話は、テレフォン法話第三集に掲載したものです。

光明寺の歴史



当山は南岳山・清水院・光明寺と称し、讃岐国多田郡広田村の城主・入江兵庫守の次男・釋智雲（俗名・入江主計）によって開かれました。

孫の釋長雲（3代目住職）は、織田信長の石山本願寺攻め（石山合戦）に参戦しましたが天正3年（1575年）大阪守口において落命。

釋智雲は、孫の菩提を弔うために、同年（1575年）広田村に堂宇を建立しました。

天正8年（1580年）、釋常賢（4代目住職）は本願寺が紀州鷺の森に退去される時、本願寺に随行し、その功勞により「阿弥陀如来木像」一体を本願寺より下付されました。

（★この木像は、聖徳太子作と伝えられ、永く当山のご本尊としてお祀りしていましたが、現在は、本堂左余間にご安置しています）

その後、戦乱が四国に及ぶや、一族はその難を逃れるため、伊予国新居郡当田（現・新居浜市光明寺）に移住しました。

西暦1582年頃です。

（★地名の光明寺は当山の名前に由来するものです）

釋常真（6代目住職）は松山城主、加藤嘉明侯の命を承けて、加茂川の堤防修築の大土木事業を完成させ、近世西条発展の礎を築きました。

この功績により、大町常心に西条光明寺を開基しました。

西暦1600年頃のことです。

（★常心の地名は常真に由来するものです。昭和2年、同所に「常真法師遺跡記念碑」が有志者によって建立されました）

享保16年（1731年）釋寬超（12代目住職）紺屋町に本堂を建立しました。

（★旧本堂はこの時のものです）

釋寬道（13代目住職）山門建立。

（★現在の山門はこの時のもので、西暦1750年頃の建立です）

昭和28年（1953年）釋寬興（21代目住職）現在地に移転。

昭和30年（1955年）鐘楼堂を建立。

平成5年（2000年）釋一宏（22代目住職）建築家・安藤忠雄の設計による伽藍を改築。

「宗祖降誕会」 厳修



好天に恵まれた5月31日、足利孝之先生（兵庫教区・安養寺住職）をお招きして、宗祖降誕会が行われました。

あらゆる者を無条件に救うお念仏のみ教えに生きることの素晴らしさをお話いただきました。30名の参拝者がありました。次回の法座は秋の彼岸会法座です。



「西条組門徒総代会」開催

長らく活動が停止していました「西条組門徒総代会」の総会と研修会が旧東予市のホテルユニバースで開かれました。

午前中、総会で本年の活動方針が立てられ、昼食をはさみ午後より西村敏夫氏（四州教区門徒総代会長・門徒集会議員）の「総代のあり方と意義」と題した記念講演がありました。ご自身の総代としての活動振りを披瀝しながら、寺院の活性化を図るためには若い世代の方々を育て、お寺へ足をはこんでもらうことが大事であるといったことを話されました。当日、40名余りの参加があり、光明寺からは4名参加いたしました。

旧本堂の鬼瓦の調査研究進む 『史談誌』に掲載予定！



西条史談会の元会長三木秋男氏の調査により、光明寺の旧本堂に使用されていた鬼瓦が西条市に現存する鬼瓦で最も古いものであろうと判明したことを機に、この鬼瓦を中心にした庭整備（親鸞聖人750回大遠忌事業の一環）を行いました。

このことは本紙67号でお知らせした通りですが、今回の三木氏の調査結果を受けて、安永省一氏（光明寺総代・西条史談会所属）が鬼瓦に関する研究文を執筆することになり、次回発行の『史談誌』（西条史談会発行）に掲載されることになりました。

趣味の広場



俳句を楽しむ(四十七)

森本隆を

この文を書いている今はまだ梅雨のまっ最中です。しかし、暑い。この近年、梅雨もずいぶん荒っぽくなり、昔のようにしとしと降り続くのではなく、局地的に豪雨を降らすことが多く、水難だけでなく土砂崩れなどの災害をもたらすことが多いようです。この『光明寺だより』が皆さんのお手もとに届くころには梅雨も晴れて、猛暑炎天の真夏を迎えていることと思います。今回は、エコばやりの風潮にも合わせて、日本に昔からある夏の過し方の工夫や生活の知恵のようなものが季語となっているのに焦点を合わせて、秀句佳句をみていきましょう。

思ひ思ひに外を見てゐる夏座敷 細見綾子
日は遠く衰へゐるや軒簾 のきずだれ 松本たかし
まず一句め。かつては七月に入ると障子などを外して夏用の建具に入れ替え、座敷を開放的にし風通しをよくしたものです。

二句めは、ま夏の厳しい日光をさえぎるために、軒端に吊るした簾を通してやつと夕方を迎えた弱い日の光を感じ、ほっとした気分を詠んだ句です。

一本の団扇やりとり老夫婦 野島無量子
みな海へ行き風鈴のよく響く 町山直由
私たちはすっかりクーラーに頼り切り、今や部屋ごとにエアコンが取り付けられた家での生活になったしまいました。この二句のような光景、風情は昔のものになってしまいました。一本の団扇をやりとりしながらこれまで歩んできた日々を夫婦で語り合っているのでしょうか。二句めの風鈴。これは今でも時折目にはしますが、昔の情緒とはほど遠い、ただの飾りのような感じがです。若い者は子供連れ海水浴に出かける。残った年寄りが広い部屋で風鈴の音を耳にしながら留守番をしている。ただそれだけの情景ですが、自然をそのまま受け入れ、人間の心がお互いに通い合っている、古きよき日本の一場面ですね。
また、夏の宵の風物の一つに「納涼」がありました。夕涼み、宵涼み、涼み台、門涼み、橋涼み、縁涼み、といった季語があります。
左右の山暮れて相似る橋涼み 富安風生
今日のことすっかり忘れ夕涼み 河野扶美
経済的には決して豊かではなかった時代の日本人にあつた心の余裕といったような趣をたたえた句です。あまり欲を持たなければ、心にゆとりが生まれるということをおかつての

日本人はよく知っていたのですね。小さな橋の上まで足を伸ばすと川面を吹き渡る風が思いのほか涼しい。やつと日が暮れ、夕方の涼しくなった風に当たっていると今日一日の苦勞をすっかり忘れていて自分になつて見たい一度、こんなゆとりある気分になつて見たいものです。

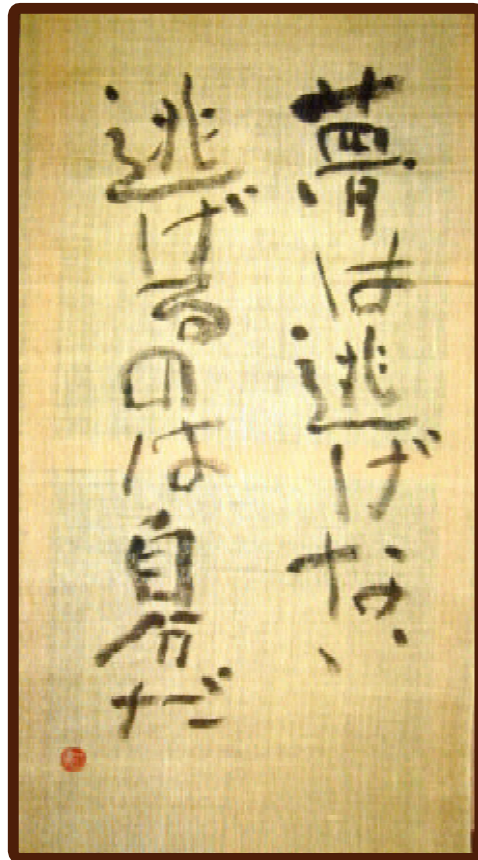
たくはへて自ずと古りし梅酒かな

松本たかし

甘酒すず啜る一時代をば過去となし 原子公平
梅酒は今も多くの家庭で作られているようです。毎朝酒盃一杯の梅酒を飲んで夏の暑さを乗り切る、といった昔の人の知恵は今も重宝されています。甘酒は何となく寒い冬の夜の飲物のように思いますが、実は夏の季語です。暑い日に熱い甘酒を飲んで暑さに勝つ、これも先人の知恵なのです。その他、「打水」、「麦茶」、「行水」、「噴水」、「釣葱つりしお」など、昔の人の知恵はどれもエコなのです。まだまだ暑い日が続きます。お体に気をつけてお過ごし下さい。



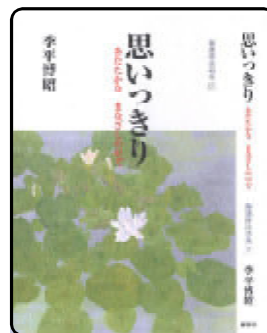
住職書作品



本 BOOK

『思いつきり』

―あたたかな まなざしの中で―



著者 季平博昭
発行所 探究社
定価 1680円（税込）

本書は「伽羅羅塾^{かろうろじゆ}」（藤田徹文先生主宰の勉強会）から毎年出されているカレンダーの言葉の解説文（著者担当分）をまとめたものです。

「思いつきり泣いたり笑ったりそれが生きること」「一人じゃないよみんな誰かの大切な人」「本当の強さとは弱い自分を認められること」等々、十四の言葉を味わい深く解説されております。著者の優しい人柄のにじみ出た心温まる法話集です。

著者は現在、本願寺派中央相談員のほか、龍谷大学非常勤講師、中央仏教学院講師にも就かれております。

彼岸会法座

と き 9月18日(土)
午後2時
講 師 小林顕英先生
大阪教区・法栄寺

★バックナンバーのお知らせ

「光明寺だより」1号〜67号

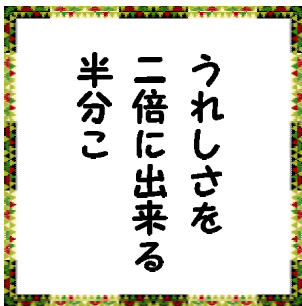
一部・25円(送料120円)

「テレフォン法話集」第一〜六集

一部・300円(送料120円)



言葉のプレゼント



テレフォン法話
0897-53-4585

*次号発送予定・・・9月下旬

「光明寺だより」を、ご家族の
皆さんでお読み下さい。

★5月31日(月)、足利孝之先生をお招きして「宗祖降誕会」が行われました。30名の参拝者がありました。
(*5ページ関連記事)

★本山団体参拝の申し込みの定員が残りわずかになりました。50年に一度のご縁です。参加ご希望の方は、お早めにお申込下さい。

★7月3日(土)、西条組門徒総代会がホテル・ユニバースで行われました。40名余りの参加がありました。
(*5ページ関連記事)

★サッカーのイタリアプロリーグに移籍が決まった長友佑都選手(西条市出身)に激励の意味を込めた「書」を書いて欲しいと知人から依頼があり、何とか書いてみました。

★5月2日、藤田徹文先生がNHKテレビ「こころの時代」に出演され、「いのちとの出遭い」という題名でお話をされました。

